

ソルフェージュスクール演奏会 日本橋公会堂 2021年7月4日(日)

大切なソルフェージュスクール演奏会

2年ぶりにソルフェージュスクール演奏会が開催されました。もちろん、まだ油断できない状況下でしたので、「歌なし」「集まったの練習もなし」という新しい形でのチャレンジでした。それでも会場は温かい音と想いにあふれていました。できる限り自主練し、数回の合わせで本番です。それでも子供から大人まで気持ちを寄り添わせながら素敵な音楽を紡いでいました。帰り道、故石田昌孝先生の言葉を思い出しました。先生が亡くなられる直前に連弾をすることになり、合わせをお願いした時のこと。「音楽は、楽譜から感じたことを音にすれば、自然と合うようになっていくのだから心配しないで」とおっしゃり、肩、肘、手首にそっと触れ、「あとは自由にやりましょう」と誘って(いざなって)くださいました。そんな大切なことを思い出させてくれる今回の演奏会でした。最後の「ラデツキー行進曲」も会場が一体となったアンサンブルになりましたね。おみやげのスクールロゴ入りカスタネットと一緒に、コロナ禍だからこそその演奏となりました。

さあ、これからも前を向いて音楽を楽しみましょう。だって、音楽に自粛はないのですから。【江原陽子(講師・Sol & Pf)】

～保護者の方の声～

2年ぶりの日本橋公会堂での演奏は、「姉弟で合奏」という思いがけない企画も加わり、本番を楽しみに練習を重ねてきました。弟の熱は初めての舞台で何とも言えぬ興奮を覚え、姉の千嘉は弟のことを気にかけて自分の演奏どころではなく、多くの時間を共にする姉弟ならではの合奏の楽しみを味わいました。ソルフェージュスクールの先生方はいろいろな視点で演奏の機会を考えてくださるなあと、今回も思わずにはいられませんでした。また、吉村先生の閉会のご挨拶の中で『熟能』というワードが出ましたが、まさにその過程をじっくりと楽しむことができるのがソルフェージュスクールの演奏会だと改めて感じました。

今回の演奏会では、ハンドベルの演奏にひじょうに心打たれました。コロナ禍で、仕事でもテレワークやオンライン会議が普通となりましたが、今までよりも人に伝えるということに強い気持ちを持たないと伝わらないと実感しています。ハンドベルの演奏もお互い距離をあげなければならぬ中、一生懸命、健気に音を合わせようとしている姿を見て、その強い気持ちが見られたように思います。七夕さまの星を思わせる綺麗な和音の響きが本当に美しく、感動しました。

【斎藤桂子(保護者)】



なんとかわいい斎藤姉弟のヴァイオリン二重奏。お姉さんが弟さんを優しくリードし、弟さんもしっかりした音で応えていました。頑張りましたね!

みんなの感想



- ♪リトミックで走ったりできて楽しかった
- ♪ハンドベル、緊張したけど先生たちがそばにいてくれたから大丈夫だった
- ♪リズムに乗ってハンドベルを鳴らすことが楽しかった
- ♪コロナでなかったら歌いたかったな
- ♪失敗もしたけれど楽しかったので良かった。しばらく会えていなかった友達と会えて、嬉しかった

～プログラム～

- 【第一部】
- | | | |
|----------------|---|--|
| 1. 室内楽/連弾 | A 二重奏
B ソナチネ
C 狩人の合唱
D 主よ、人の望みの喜びよ
E ヴァイオリンソナタ No.4 3,4 楽章 | ウェーバー
マザス
ハウプトマン
ウェーバー
J.S.バッハ
ヘンデル |
| 2. リコーダーアンサンブル | カプリオール組曲より
1. パスダンス
2. パヴァーヌ
3. トルティオン
4. ビエ・アン・レール
5. サーブルダンス | ビター・ウォロック |
| 3. 弦楽合奏 | オクテット | メンデルスゾーン |
- 【第二部】
- | | | |
|----------------|--------------------|--------|
| 4. リトミックとハンドベル | リトミック
たなばたさま | 下總皖一 |
| 5. 弦楽四重奏 | カルテット Op.33-2 1 楽章 | ハイドゥン |
| 6. フィナーレ(全員参加) | ラデツキー行進曲 | シュトラウス |



フィナーレは津布楽先生の指揮と、加藤先生・込山先生のピアノ、そして皆さんのカスタネットによるラデツキー行進曲!会場全体がひとつになって盛り上がりました。

ラデツキー行進曲で使用したカスタネット。生徒の皆さんにおみやげとしてお配りしました。ソルフェージュスクールのオリジナルロゴ入りです。



～「私達のソルフェージュ教育」に紡がれる想い～

石田昌孝先生の言葉

ソルフェージュスクール創立メンバー、石田昌孝先生ご執筆の「私達のソルフェージュ教育」(当スクールで1977年～89年にかけて発行していた冊子「ソルフェージュ音楽」内に連載)。前回は「拍」についての記事をご紹介しました。今回はそれに続き、拍節の緩急ある運動が生き生きとした音楽を生み出すこと、それを譜面から読み取るためにソルフェージュが大切であるということについて触れています。

「私達のソルフェージュ教育 (3)」

音楽の流れは拍によって区切られ、量られており、拍は数個ずつがまとめられ、新しい単位として小節になることを前回述べました。小節としてまとめられた拍の中で、そのグループの最初の拍、第一拍が特に大切です。第一拍は一般に強拍と呼ばれています。実際の音楽では、その名の通り強い音になる場合もありますが、そうはならぬ場合もよくみられます。そのため、この名は第一拍について考えようとする人を混乱させます。

小節を一つのまとまりと考えると、拍のとき考えたように、小節も又一定の動きを繰り返す運動であると考えられます。それは回転する運動と考えるとわかりやすいと思います。一小節ごとに一回転する運動があり、音楽が続く間は動き続けます。しかし、それはひとりだけで動くものではありません。音楽をする人自身が動かしていかなければなりません。それを動かすために力を加える場所、それが第一拍です。そこでちょうど一回転するのに足りるだけの力が加えられ、小節のその後の部分は、そこで与えられた勢によって動いていきます。これの繰り返しによって回転が続いていきます。

第一拍はこのように音楽を前に進める力が加えられる場所です。しかし、音楽で音の強弱を決める要素は他にもいろいろあり、それらの働きも加わると、第一拍で奏される音が必ず強くなるとは限りません。けれども、音が強くても弱くても、音楽を続けていくためには小節の回転運動は続けなければなりません。極端な場合には、第一拍に休符しかない時、つまり音が鳴らない時でも、音楽を

続けていくためにそこに力を加えなければなりません。

第一拍、いわゆる強拍はこのようなものですが、どの小節でも同じことが繰り返されるので、小節は第一拍から始まる一つのまとまりとして感じ取ることができます。そして、音楽の流れが拍によって区切られ、量られているのと同じように、小節によっても区切られ、量られているのがわかります。

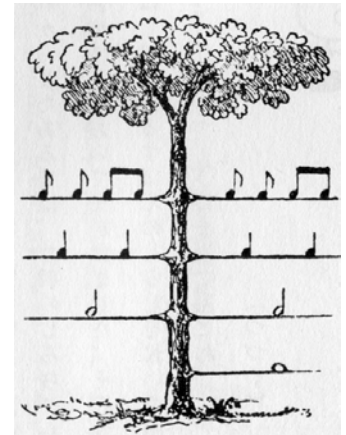
今迄述べた事からわかるように、小節の回転運動は緩急のある動きです。回転運動にはそういうものばかりでなく、もっと一樣な動きのものもあります。しかし、小節の動きはそうではなく、又そうであってはならないものであると思います。

緩急のある動き、緊張と弛緩のある動きは生命を感じさせますが、たとえばモーターの回転のように均質な動きから、生命の動きを感じ取ることはできません。緊張と弛緩のある動きは生命のあるところには常に存在し、それは我々の生命を保つ源である呼吸と心臓の動きにもはっきりと認められます。あるいは、この事が緊張と弛緩のある動きから我々が生命を感じる理由であるのかも知れません。

私共が求める音楽は、単なる娯楽や気晴らしとしてではなく、精神の糧となり、心のよりどころとなる音楽ですから、それは生命に満ちたものでなければなりません。ソルフェージュの勉強の時、拍を打ちながら歌うだけでなく、第一拍を強く打ち、小節の緊張と弛緩を心に感じながら歌うことが、生き生きとした音楽を作り出すために特に大切なことです。

さて、拍はまとめられて小節となりますが、小節はまとめられて新しい単位となり、それは更にまとめられてさらに新しい単位となります。このように、音楽の拍節構造は幾重にも重なり合っています。しかし、音楽は拍節だけで出来ているのではなく、更に旋律と和声が音楽を構成する要素であると言われています。旋律はその独自の法則によって動きますが拍節や和声と結びついて互に影響しあいます。和声についても全く同じことが言えます。

このように音楽の要素はそれぞれが幾層にもなり、各要素が複雑にからみ合い、互に他によって制限されたり、他の動きを強めたりしていますが、それは音楽に表されている人間の精神や感覚、感情、情緒等が同じよう



石田昌孝先生

北海道小樽市出身。お母様の影響でピアノを習い始める。北海道大学理学部卒業後、同大学教育学部音楽科に再入学し音楽を学ぶ。その後、東京で大村多喜子先生と出会い、ソルフェージュスクールの設立に参加。

「音楽が、言葉と同じように、全体の文脈の中で何を言っているかを理解する助けとなるもの」がソルフェージュで、ひいては楽曲分析にまで達するのだ、という考えのもと、ソルフェージュスクールで50年に渡りソルフェージュとピアノの指導に当たる傍ら、昭和音大短大ピアノ科の教授も勤める。2012年3月逝去。



ソルフェージュ教室にてピアノを教える若かりし頃の石田先生

に複雑で幾重にも重なり合い、互にからみあっているからに他なりません。

音楽は心に感じたものを音によって表現する芸術であり、演奏は作曲家がそれを楽譜として書き表したのから生きた音楽を再び取り出すことです。複雑で錯綜した音譜から生きた音楽を取り出すにはどうすればよいかを学ぶのが、ソルフェージュの勉強であるということもできるでしょう。

(1978年3月春季号より)



「音楽的人格を持った優れた音楽家」を目指すこと ソルフェージュスクール創設者 大村多喜子のおはなし



ソルフェージュスクール創設者であり、ヴァイオリン教師であった大村多喜子先生。逝去されてから年月が経ち、直接お会いになったことのない生徒さんも増えてきました。大村先生がどのような先生であったか、このソルフェージュスクールをどのような思いで作られたのか。ぜひ皆さんにお伝えできればと思い、著書「楽の音は海をこえて」からいくつかの言葉を引用し、まとめました。

音楽の拍は、人間の体でいえば脈拍ということになります。ヴァイオリンを演奏するときは、いつもこの拍を感じていなければなりません。そして、フレージングは呼吸です。リラックスして大きく深呼吸します。その深呼吸の中にフレーズを入れていくのです。

先のページでご紹介した通り、石田先生も同様のことをおっしゃっています。拍を感じ呼吸をすることは、ヴァイオリンに限らず全ての楽器に必要な感覚です。

当スクールのソルフェージュレッスンでは、小さなお子さんにもリトミックの時間で拍を打ちながらリズムを歌わせ、自然に拍の理解へと結びつけています。子供たちが先生のピアノに合わせて楽しく体を動かしている姿はとても可愛らしく微笑ましいものですが、いざ同じことをソルフェージュ経験のない大人が真似しようとすると、意外なほど難しく驚かれることと思います。ここでソルフェージュを身につけた子供達は、やがて楽譜を初見で理解し曲の構造を把握するなど、時には音大生であっても容易にできないようなことまで自然にできるようになっていきます。

見た目に分かりやすい成果を求めて技術習得のみに偏り、ソルフェージュをおざなりにしてしまうと、音楽を理解する力は育ちません。大切なことは往々にして目に見えづらいものですが、このスクールの目的は、単に演奏のテクニックを身につけるだけではなく、生徒達が音楽を心から理解し楽しめるようになることであり、当スクールにおいて器楽と関連付けてソルフェージュを重視する理由もそこにあります。

【大村多喜子 略歴】

- 1916年 北海道に産まれる
- 1934年 東京女子大学英語専攻科入学
- 1936年 大学在籍中にアメリカへ留学
- 1937年 ジュリアード音楽院にてハンス・レッツに師事しヴァイオリンを学ぶ
- 1941年 帰国し、リサイタルを重ねる
- 1944年 建築家である吉村順三氏と結婚
- 1950年 再度ジュリアード音楽院へ留学
帰国後再びリサイタルを重ねる
- 1961年 市ヶ谷に「ソルフェージュ教室」を開校
ソルフェージュ・個人レッスン・アンサンブルを
三本柱とした音楽指導を始める
- 1967年 目白へ移転し「ソルフェージュスクール」へ改称
- 1977年 財団法人日本ソルフェージュ振興会を設立し、理事
長に就任 ソルフェージュスクール独自の音楽
教育に一意専心
- 2012年 4月1日 公益財団法人ソルフェージュスクール
に移行登記 9月に逝去

今日に至るまで、娘である吉村隆子先生を中心に多くの講師が大村多喜子の精神を受け継ぎ、音楽の高い芸術性を極め研究し、生徒達に豊かな感性を育み続けている。

向こう(アメリカ)で勉強するうちにすっかり音楽のとりこになってしまっ、演奏家ではなくて、「音楽家」になりたいと思ったの。それも、「プロの音楽家」じゃなくて、「グッドミュージシャン」「優れた音楽家」になりたいって思ったの。(中略)自分が理解した音楽をほかの人にも伝えたいという気持ちで、このスクールを始めたのよ。



恩師のレッツ先生(写真左)と留学中の大村先生(写真右)。中央はEmil Herrmannという有名な楽器商の方です。

当時、音楽留学先といえばドイツやフランスなどのヨーロッパが主流でしたが、大村先生はアメリカに渡りました。アメリカを選んだ理由として、1つには日本でヴァイオリンを習っていた先生からジュリアード音楽院のハンス・レッツ先生(ブラムスとも親交の深かったヨーゼフ・ヨアヒムの弟子)の紹介を受けたこと、もう1つには、当時はロシア革命が起き、ドイツではナチス政権が台頭しており、多くの音楽家が第二次世界大戦に至るヨーロッパの混乱から逃れてアメリカに移住していたということがあります。「今はヨーロッパよりアメリカの方が優れた音楽家がいる」という話を聞き、大村先生はアメリカ行きを決意します。

レッツ先生のもと、大村先生はジュリアード音楽院初の日本人留学生として、音楽を基礎から学び直すこととなります。「これまで日本では譜面に書いてあることをただ弾くだけで、なにも理解していなかった」とのちに語っているように、大村先生はレッツ先生から音楽を心から感じ、「音楽的人格をもった優れた音楽家」を目指すことを学びます。

「僕はヨアヒムのスピリットをあなたに与えるから、そのスピリットを日本に持ち帰り、日本で与えなさい」「グッドミュージシャンになりなさい」

レッツ先生からそのような言われた大村先生は日本に帰国後、幾度かリサイタルの機会を得ますが、ほどなく日本で演奏家として活動を続けることに違和感を覚えます。当時の日本の音楽界は未成熟であり、演奏家も少なく、机上でヨーロッパの音楽を学んだ音楽評論家が表面的な論議を重ねるようなことはあっても、音楽の基礎教育を考える風潮はありませんでした。加えて、東京音楽学校出身ではなく、留学先もヨーロッパでなくアメリカだった大村先生は、当時の日本の音楽界では特別な感覚を持った存在でした。音楽の基礎を学んだ人が少なく、学ぶ場もないためにその意義を理解できない人が多い日本において、アメリカで学んだ音楽の本質を「演奏家」として日本で示すことの難しさを感じた大村先生は、一人の演奏家が世に出ることよりも、まず音楽をする人たちの底辺をしっかりとさせ、その層を厚くしていかなければならないという思いを持つようになります。

結婚・出産を挟んで2度の留学をしたのち、大村先生は同じ志をもつ仲間と共に「ソルフェージュ教室」を創設しました。



ソルフェージュ教室創設メンバーたち。右から3番目が大村多喜子先生。

大切なのは、ヴァイオリンの練習によって音楽的な人格を形成することです。焦って決めてはなりません。現代の世の中がいくらせわしく、迅速な決断を必要としてもです。まずは「グッドミュージシャン」つまり「優れた音楽家」になることです。音楽を職業としていない人にも「優れた音楽家」はたくさんいます。音楽を職業としている人にも「優れた音楽家」になれない人がたくさんいます。

ソルフェージュ教室が始まった昭和30年代の日本は、音楽教育が盛んになり始めた時代ではありますが、残念ながら社会の中に音楽的な環境はほぼなく、巷の教育方法も大村先生が目指すものとはほど遠く、子供達が物心つく前に訓練のように練習させ、メカニカルな技術修練に終始するものばかりでした。技術は努力である程度賄えても、音楽を理解し好きにならなければ聴く人に感動を与える演奏はできないし、感動のないものは音楽とは言えません。成果主義・結果主義的思考は現代でも見られることですが、分かりやすい完成度ばかりを重視するのではなく、子供も大人もプロアマ問わず、音楽を楽しく学びたい人々が「音楽的人格を持った優れた音楽家になる」ために、このスクールはあります。たとえ将来音楽から離れることになったとしても、ここで育まれた豊かな音楽的感性は長い人生の中できっと生きてくるはずで



ソルフェージュを使ってソルフェージュのレッスンを行っている様子。

いつも澁刺として明るくお元気だった大村先生。余談ですが、後年、足の怪我でリハビリを行うことになった際、療法士の方に教わる足踏みのリズムが「ソルフェージュのレッスンみたいだね」と笑い、楽しみながら訓練に励んでおられたそうです。

音楽を知ることが、人生に少しでも潤いを与えてくれればと思っています。それが、スクールの教育目標です。

今回の引用元「楽の音は海をこえて」はソルフェージュスクールに備えております。お貸し出しも可能ですので、もしご興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひお気軽にお手に取ってご覧ください。

ソルフェージュスクールのスタインウェイ・ピアノ

スタインウェイは、世界中のコンサートホールで使われ、多くのピアニストからの絶大な人気を誇る世界最高峰のピアノとして広く知られています。ソルフェージュスクールの3階ホールに2台あるグランドピアノのうち、向かって左側の1台もスタインウェイです。いつもはカバーをかけて大切に保管していますが、ピアノの生徒さんはおさらい会の時に弾く機会がありますね。今回はソルフェージュスクールのスタインウェイ・ピアノについて、その特徴をご紹介します。

♪セミコンサートグランドピアノ「C-227」モデル♪

ソルフェージュスクールのスタインウェイは「C-227」というモデルのもので、同じくスタインウェイの「D-274」モデルとともにコンサートピアノの最高峰と謳われています。大ホールでのフルコンサートに使用されるDモデルに対し、Cモデルは中・小規模のホールに向いており、透明感溢れる高音から深く包み込まれるような低音まで、多彩な響きが特徴的で、迫力あるフォルテも繊細なピアノシモも美しく奏でることができます。



現在、スクールのスタインウェイは購入してから40年近く経過しており、修繕が必要な状態となっています。そのため、本年度中に修繕費用のための寄付を募る予定であります。これから長く大切に使うため、皆様にお力添えいただけますと幸いです。

パ
ウ
ゼ

♪現代では珍しい艶消し塗装仕上げのコンサートピアノ♪

スタインウェイのフルコンサートピアノには、艶出し塗装仕上げのものと艶消し塗装仕上げのものがあります。現在通常販売されているフルコンサートピアノは全てが艶出し仕上げのものとなっていますが、数十年前までは、日本では長い間艶消し仕上げのピアノが販売されていました。ソルフェージュスクールにあるスタインウェイは1983年に神戸からやってきた、艶消し塗装仕上げのもの。光沢を抑えた静謐な佇まいは、スクールの雰囲気によく合っていますね。

【今後の予定】

楽しくアンサンブル!

7月22日(木・祝)

夏季合宿 in 目白

8月13日(金)~15日(日)

今後の状況により変更や中止などが生じた場合は、随時ホームページやFacebookなどでお知らせします。

Facebook



Web



〈生徒の皆様へのお願い〉

- ・マスクをご着用ください
- ・スクールに到着時、入り口に設置してある消毒液で手の消毒をお願いします
- ・体調がすぐれない場合は無理をせずお休みください

〈スクールの取り組み〉

- ・講師・スタッフはマスク着用
- ・手洗い、手消毒の徹底
- ・スクール内設備、室内、共有物の都度消毒
- ・レッスンごとの換気、ピアノの拭き掃除
- ・レッスン中も生徒と一定の距離をとる

〈編集後記〉

2年ぶりとなった演奏会。感染症対策を最優先し、例年とは異なるプログラム構成で臨みましたが、生徒や保護者の皆様にご理解とご協力をいただき、無事終えることができましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございます。今回のNEWSLETTERは通常よりボリュームアップし、スクールのルーツとなる内容を多く掲載しました。夏休み中にお読みいただければ幸いです。厳しい暑さが続きますが、どうぞ健やかにお過ごしください。

